

vol.44

## 退化に抗う

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

デジタルカルチャーはあらゆる行為から身体性を剥奪してゆく。アナログ時代の身体感覚を引きずっている者は必死にデジタル化に対応しながらも、身体が退化の一途を辿っているという不安を拭い去れない。手書きからキーボードへ、紙の本から電子書籍へ、手紙やファックスからメールへ、図書館通いからネット検索へ、また人との接触も対面からオンラインへと変わる中、自分の頭で考える割合が減っていることを痛感する。手書きの時代には文字を一画ずつペンで書き込み、四百字詰の原稿用紙の束を積み上げながら、長編を書いていたのだが、もうあの頃には戻れない。リサーチもネットでスピーディにしかも簡便にできることに慣れてしまったので、もはや図書館で関連の書物を漁るあの迂遠な回り道はできない体になっている。しかし、本を探す、ページをめくる、ペンを走らせる、人に会って話を聞くといった手間は決して、無駄だったとは思わない。一連の動作は記憶の強化に結びついていたし、

回り道したことで得られた雑多な知識が教養の蓄積になったからだ。

生成AIはさらに人を手間と思考の節約へと導く。現状の生活でもパソコンやスマホを身体の一部のように運用し、それなしに時間を過ごす方法を忘れてしまったといっても過言ではない。無意識のうちにその脳と身体は電子部品のように規格化されているかもしれない。

そろそろリハビリを始めないと、人としての劣化が始まってしまいそうで怖い。今すぐにでも始められるのは散歩であろう。フットワークの衰えは老化を加速することをよく知っている人は散歩に熱心である。そして、よく歩く者はよく考えるのである。土地の起伏や空気の質感を敏感に察知しつつ、地名や史的由来に関心を抱きながら、あちこち歩き回っていれば、自ずと「街を読む」「土地を探る」というフィールドワークを実践することになる。散歩には毎回のテーマがあってもいい。たとえば、今日は五軒はしご酒をするとか、何人の子どもとすれ違うか数えるとか、富士が見えるポイントを探すといったテーマである。脳も身体も本来、そのような無駄を喜ぶようにできている。

### Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授